11.先祖供養

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6965

11. 先祖供養

阿　部　憲　和

1. はじめに
2. 寺院・仏壇・墓
3. 先祖供養
4. 考察

1. はじめに

調査地である西保地区は、浄土真宗の盛んなところである。実際に聞き取りを進めてゆく過程でも、寺院を中心としてのお講を年に何度も行っている話などを耳にし、宗教が生活に密着しているという印象を受けた。そこで本章では、それぞれの家で行われている先祖供養について取り上げる。なぜ先祖供養なのかと言えば、葬式などとは異なり、それが生活の中で当然やるべきもののひとつとなっているからである。日常のあたりまえの風景として捉えられているであろう先祖供養は、一体どのようにして親から子へ受け継がれてきたのだろうか。また、これからもそれはきちんと受け継がれてゆくものなのだろうか。本章ではまず西保地区全体について、寺院や仏壇、墓を通して概括し、先祖供養を一年と一日というふたつの時間軸に分けて詳述する。最後に考察として、近年における変化と、実際に先祖供養を行っている人たちが何を思っているかについて書いていく。

2. 寺院・仏壇・墓

家単位での先祖供養という一連の行為において、重要な役割を果たしていると思われるのは墓と仏壇であろう。言うまでもなく両者はともに、故人がなお宿っているという意識が色濃く反映されているところである。さらに、寺院がこれら家々を主導するという立場にあることも忘れてはならない。ここで主に取り上げるのは家を中心とする日常的で「小さな」先祖供養の儀礼だが、それでもこれら寺院側の果たしている役割は決して小さなものではないはずだ。以下、寺院と仏壇、墓のそれぞれについて西保集落での位置付けと特徴的だった点をいくつか述べる。

まず寺院との関係から見ると、他の北陸地方と同様に、西保地区の４つの集落（大沢、上大沢、上山、西二又）でも浄土真宗の大谷派（東本願寺派）を信仰している家が多いことが分かる。これら西保の４集落には大沢の霊高寺、上山の願誓寺、西二又の長誓寺という３つの寺が建てられており、す

べて浄土真宗大谷派の寺院である。さらに西保地区からは外れてしまうが、近隣の門前町にも徳願寺という真宗の寺があり、門徒が西保地区でも極めて少数ながら散見される。

4集落別に各々の寺院別の門徒構成（2006年時）を詳述する。西二又では12戸が長誓寺、5戸は願誓寺、3戸は近隣の門前町の徳願寺・本誓寺の門徒ということであった。上山では願誓寺と長誓寺の門徒が22戸ずつで、門前の寺院の門徒が1戸。上大沢は集落内に寺院を持たないが、門前の寺院に属する門徒が3戸、願誓寺5戸、長誓寺12戸という構成になっている。

集落内に寺院を持たない上大沢はともかく、上山・西二又も門徒の非統一が見られることに注目したい。このことは願誓寺の住職の言によると、寺院への檀家（門徒）登録制度が確立された江戸初期になされたもので、一向一揆の激しさを恐れた幕府が門徒の過度な紐帯を防ぐため、同集落内に異なった寺院の門徒を配置したことに由来しているという。

大沢はさらに複雑である。願誓寺、長誓寺といった近隣集落の真宗寺院に加え、輪島や門前にある禅宗や日蓮宗、真言宗の寺院も含めると、90戸の集落の中に11もの寺院の檀家（門徒）[1]が散在している。（ただし、願誓寺と長誓寺の門徒だけでほぼ半数を占めてはいる）

他集落とは異なる特徴的な点として、大沢にある霊高寺は門徒を一切持たない。門徒を持っていないにも関わらず、どのようにして霊高寺は存続し、どういったかたちで地域と関わってきたのか。これは前述の江戸幕府の都合という理由と合わせて、一昔前の大沢の交通事情とも関連性が大きい。まず誰かが亡くなった場合、通夜や本葬などは直接門徒が属している寺院の僧侶によって行われるが、その後の枕勤めから四十九日法要までの間の期間に行われる数回の「七日勤め」（亡くなった日から数えて7日毎に行われる法要。後記参照）では、週に一度の割合で遠距離に置かれた門徒の家まで向かうのは煩雑なため、本来門徒が所属している寺院の僧侶に代わって、霊高寺の住職が読経を勤めるのである。「辻本」もしくは「縁借り」などとこの地域の住人に呼ばれているこのような特定の門徒を持たない寺院のあり様は、交通事情の特に厳しかった輪島では珍しくないもののようだ。こういった特殊なシステムを必要とするほどに複雑な寺院の増大と門徒の細分化が起こった原因のひとつとして、江戸期の大沢地区が北前船などの寄港地として繁栄しており、寺院側が少数の門徒・檀家のみを相手にしても維持費や生活費などの採算を比較的容易にまかなえたことが挙げられよう。

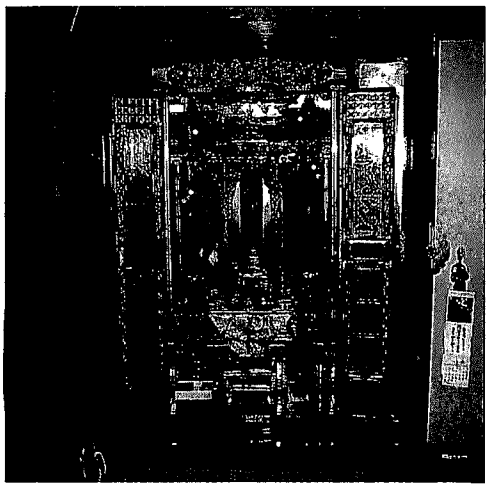

写真1　仏壇

次いで住民の家の方に目を転じてみると、概して仏壇は非常に大きく、豪奢なつくりをしていることにまず驚く。西保集落でも、他の真宗門徒と同じように、仏壇を「その家の一種のステータス」と見なす傾向がある。これは仏壇が

豪華で立派なほど、つまり仏壇にお金がかかっていればいるほど、その家の地位の高さを証明することができるということらしい。「家に入ったら何よりもまず仏壇を褒める」(60 代 女性)、「このあたりではウチが一番いい仏壇を持ってる」(60 代 男性) など、うかがったいくつかの言葉からも、その家の豊かさを象徴するものとして仏壇が扱われていることが理解できる。

仏壇には二枚の扉がある。一枚目の外扉は完全に内側を見えなくするためのものであり、黒く漆で塗られている。その内側にもう一枚、金箔のはられた内扉がある。格子状になっており、内扉を閉めたままでもある程度中の様子をうかがうことができた。普段は内扉を閉めたままにしておき、お参りするときや盆正月など、特別な場合に限りそちらも開けるようにしているようだ。二枚の扉を開くと、奥中央には阿弥陀如来、その右に蓮如、左に親鸞の像または掛軸が祀られている。さらに、側面の内壁に「法名軸」と呼ばれる掛軸が掛けられている家も見られた。これは弔いあげの済んでいない故人の名前が書かれているもので、いわゆる他宗派での位牌に相当する。これは元の教義からすれば明らかに矛盾である。そもそも真宗は、仏壇に先祖供養のための場としての位置を認めない。これは人々が死後、阿弥陀の導きにおいて「即得往生」するという考え方を採っているからである。つまり教えに立てば、先祖はこの世には残らないものなのだ。だが、実際に西保では先祖供養は行われている。ならばそれは中央の指図によらない、地域の風俗と根づいた独自のものなのではないか。この詳細については後の節で述べる。

一方墓についてであるが、上山・西二又といった山がちな集落では寺院の近くにまとまっている。しかし、大沢では家のすぐ隣にある場合も見られるが、その家所有の畑近くや山林の中など家から遠く離れているところにあることが多い。一方、禅宗など他宗派の墓はまとまってひとところに集まっている点で対照的である。上大沢でも以前はそのような状態だったらしいのだが、平成 6 (1994) 年に周辺の地すべり防止のための工事が行われるのを期に、集落のすぐ近くへ移動した。だから現在上大沢では、20 軒分の墓が集落のすぐ近く、道路と川を挟んだ山のたもとに寄り集まるようにして並んでいる。

3. 先祖供養

人が亡くなるとまず「枕勤め」が行われ、その後に本葬 (いわゆる葬式) が営まれる。枕勤めとは人が亡くなったその日に行われるもので、僧侶が寝かされている故人の枕元に経ち、読経を行う。さらにその後は、身内が部屋に残って夜明かしをする、といった比較的小規模な儀礼のことである。西保地区では通夜はせずに枕勤めのみを行うという話もあり、いわゆる通夜に類似したものとして枕勤めが見なされていたことが推測できる。しかし現在では、ほとんどの場所で、亡くなったその日に枕勤め、次の日に通夜、その次の日に本葬、という順で葬儀がなされており、以前とは変わっている。

本葬の手順や意義、変遷等については 10 章に詳しく述べられているためここでは述べない。

続いて初七日を皮切りに、14、21、28、35、42、49 日まで 7 日ごとに僧侶を呼んでの法要が行われ、

いったん49日で区切りをつけると次は百か日の法要、さらに次は一周忌となる。49日を「中陰」とも言いい、これはこの世と極楽との間にある境域のことである。この世界を抜けて極楽に至るまで49日間かかることに由来したものだという。49日法要を終えると、「忌明け」となり、週ごとの法要は次の百か日法要まで一段落する。

年忌法要は亡くなった年から数えて3と7のつく年に行われることになっており、一周忌の後は、3、7、13、17、23、27、33の順で続いていく。33回忌の次は50回忌になっており、ここで弔い上げとすることが多いようだ。ただし、27年の次を30年、50年としていると仰っていた家や、弔い上げを30年、さらに3回忌はなく代わりに5回忌をする、などと語っていた人もあり、必ずしも教義を厳密に守っているわけでもないようだ。これら年忌法要は、親戚をその家に集めて行う。行う時期にはとくに決まりはなく、各々が都合のよい時期に執り行われる。香炉を始めとする仏壇の飾り物も「三具足（サングソク）」から「五具足（ゴグソク）」に普段とは異なった並べ方がなされ、「打敷（ウチシキ）」と呼ばれる敷物をひく。当日は家に僧侶を呼んで読経を行ってもらい、もてなして帰ってもらった後、親戚一同で食事をとる。現在では輪島まで出かけて食べることもあるようだ。

それらに加えて、いわゆる年忌法要のほかにも盆や彼岸などの、一年ごとに循環するかたちをとる季節的な先祖供養と、一日の決まった時に欠かさずなされる先祖供養があることも忘れてはならない。ここからは実際にどのように先祖供養がなされているのかを、一年と一日というふたつの時間に分けて見ていく。

■1年の行事

1年の行事は概して、寺院側の影響が強い。ここではひとつの中心となるモデルとして上山の願誓寺の門徒である上大沢のY家での1年のサイクルを主に取り上げ、それとは異なった習慣や行事などもなるべく多くとりあげて行きたい。以下は主に寺院側が各家を訪ねてその家の祖先について経をあげる、という形式をとるものに限定してある。（表1参照）

表1　西保における一年間の先祖供養行事

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月忌さま →		〔春彼岸〕					盆	〔秋彼岸〕			報恩講（年忌参り）

月忌さまとは年に一度、農閑期の1、2、3月に行われる先祖供養の法要である。本来月忌さまとは次節でもとりあげる月命日の別名である。僧侶が家々を一戸ずつ回って仏壇の前で経を読む。僧侶は

墓までは行かないのが一般的のようである。長誓寺の門徒では報恩講と一緒のものとして扱われている。これは長誓寺の住職によると、彼が他の職業と兼業していたため、2, 30 年前から一緒にするようにしたとのことであった。月忌さま、つまり月命日での寺院主導のお参りが冬季のみに行われるのは、長誓寺と願誓寺の場合である。霊高寺は、門徒を持たないかわりこのような月忌さま参りを大沢の家々のそれぞれの月命日に行う。前にも述べた通り大沢には他宗派の人々も多く暮らしているが、それには関わりなくそれぞれの家を回って、月に一度のお参りが行われているようだ。

盆はこの地方では8月である。盆の起源について新谷尚紀『日本人の葬儀』から説明を加える。「盂蘭盆、つまり梵語のウランバナの略語であるとされ、餓鬼道に堕ちて苦しむ亡母の倒懸の苦を救おうと、その法を求めた仏弟子目連が、7月15日に百味の飲食を供えて自恣の衆僧を供養すれば七生父母、現在父母の苦難を救うことができる、と仏に教えられたという盂蘭盆経の説に由来するものであるといわれている」(新谷 1992: 227)

この地区では僧侶を呼んでその家の仏壇や墓の前で経を読む。金沢ではお盆になると墓前などにキリコと呼ばれる灯篭を置くことが多いが、西保地区では何か飾り物を仏前に供えたり、迎え火・送り火を焚いたりするなどの特別なことはあまり行わない。他地域では供え物を飾る盆棚や、無縁仏のための餓鬼棚を設けるところも多いが、西保ではそれもない。普段通りに、あまり日常と変わらないかたちでお参りを行う。ただし普段と違うこととして、仏壇の扉を開けておき、灯りや蝋燭などに火をともしておくなどのことをしている家も多いようだ。やはりそれでもこの時期は就職や進学などでふるさとを離れた人が戻ってくる時期なので、家族全員で墓に手を合わせる光景もよく見られるものであるようだ。現在では折にふれて墓にまいる、という習慣もそこまで珍しいものではなくなったが、以前は墓参りといえばこの盆の時にしてあとは来年までそれきりであった、と語ってくれた人もいた。

春と秋の彼岸はY家では行われていない。上山の一部で僧侶を呼ばずにお参りすることがあるようだが、大抵の家では重視されていない傾向にある。そもそもなぜ春分と秋分の日に彼岸という行事が行われるようになったのかと言えば、これらの日に太陽が真東から昇り真西に沈むことから、西方にあると信じられていた極楽浄土や、そこにいるであろう先祖に思いをはせる日とした風習が広がったからではないかと考えられている。だが、確かにこの彼岸という行事は阿弥陀仏の住める極楽浄土と関係の深いものではあるが、西保地区にはとりわけ後世になってから入ってきたのではないかと思われる。その理由として、ごく一部の地域でしか見られないこと、作法が日常の墓参りとなんら変わりのないものであることなどが挙げられる。実際には花を飾り、普段どおりのお参りをして終わり、というかたちをとることが多いようだ。ある住職の話によれば、彼岸という行事はやはり近年になってからこの集落で行われるようになったものだという。彼岸は他宗派の行事であると言ってもよく、さらに春秋ともに農繁期であるため忙しくてあまり暇がつくれなかったため普及してこなかったのだろう、と。しかしここ数十年でラジオやテレビなどの通信メディアの発達によって彼岸という行事があることが集落の人々にも伝わってから初めて、極めて小規模ながらこの行事が行われるようになったのだろう、そう住職は推測していた。

報恩講も12、1月の農閑期に行われるが、これは11月28日という親鸞聖人の命日にちなんで行われているものである(詳細は12章)。各寺院に集まって行われる法話が終わった後に別のものとして、主に年末から年始にかけて、僧侶が門徒の家々を回って「年忌参り」と言われている先祖に一年間の感謝の意を表すための読経を行う。この時、もしも次の年が故人の年忌法要の年に当たっていた場合は、僧侶が年忌法要のための経も読み、さらに家に法要を行うよう促す。

■1日の行事

1年周期で見た先祖供養が、寺院－門徒の関係を軸にして行われる傾向が強いのに対し、1日ごとに行われる供養のあり方を考えてみると、それがほとんど家人のみで行われていることに気付く。家単位で行われているものである以上、個々の差異もより多くあるわけだが、先と同様上大沢のY家の事例を軸として取り上げたい。

個人が家の中で日常的に行う「お勤め[2)]」の作法は大体決まっていて、まず仏壇の内扉を開き、仏壇の明かりをつけ、線香がたかれる。参加する人全員がそれぞれ数珠をもち、「正信偈（ショウシンゲ)」と呼ばれる7言60行120句からなる経典を読んで、次に南無阿弥陀仏で始まる「念仏」、その後に「和讃」を唱える。正信偈や念仏が漢文調で書かれたいかにも経らしい経なのに対し、和讃は元となった漢語の教典・教義を日本語、しかも七十五調に訳したものであり、比較的意味が分かりやすいものになっている。和讃は250もあり、その中からどれを選んで読むのかは月命日などの特別な日を除き、各家の判断に任せられている。この念仏－和讃の口唱を数回繰り返してから、和讃への理解をさらに深めるために書かれた「御文様」もそれぞれについて読む、というのが毎日朝晩行われるお参りのひとつのサイクルとなる。一回のお勤めにかかる時間は15分程度だろうか。

お勤めへは可能ならば家族全体が参加する。仏壇の正面に座った家長が一拍早く経を読み始め、家族がその後に続く、輪唱のようなかたちをとる。法事などで僧侶がいる場合は先導するのは家長ではなく僧侶の役割となる。

経の書かれている冊子を持って読まなければならないというきまりごとがあるようだったが、「小さい頃から読んでいるのだから誰だって覚えてしまう」(60代 女性）と言われるように冊子が必要ということはない。むしろ教義の正確さを守るために冊子を持つことの義務化が図られているようだ。

以下では一日をさらに細かく分け、それぞれについて簡単ながら述べる。(表2参照)

表2　西保での1日の先祖供養行事

毎日	朝	オアサジ
	昼	(ニッチュウ)
	晩	オタイヤ
特別な日のみ	月命日　28日	

オアサジは「御朝事」と書くもののようだ。朝食の前（早いところでは5時頃）に各家で行われる先祖供養である。前日に閉めた仏壇の扉を開いて灯りをともし、線香を立てる。オブクサマと呼ばれるご飯のお供えをあげるのもこの時である。水はこのあたりでは供えないきまりになっているようだ。オブクサマについては、朝晩どちらも供えると言っている人や月命日にしか供えないと語ってくれた人もおり、一定しない。

ニッチュウは「日中」であろうか。午前10時から11時の間くらいになされる。昼食の前、つまり昼日中あたりの時間に行われることがその由来であると思われる。時間が大体昼前ということで、以前は朝一仕事を終えて昼食の前に一度お勤め、という流れをとるものだったのだろうが、現在では職業が多様化し、昼時に家にいないということも珍しいものではなくなったため、ニッチュウはしていないという家も多かった。

オタイヤは一部では「ゴユウジ（御夕事）」とも呼ばれている。聞いたところによると、「御逮夜」と書くものであるらしい。これは夕食の前（大体 6、7 時）に行われる。だがそもそも「逮夜」というのは、『日本民俗大辞典』（吉川弘文館）によれば、法会や年紀法要、もしくは葬儀の前夜、という意味を持つことばであり、必ずしも夕食前のお勤めに結びつきやすいものであるようには思えない。そこでなぜこのように呼んでいるのかを聞いてみたが、「とかく昔からそう言うことになっていた」（70 代 男性）などの答えが返ってくるばかりで、聞き取りから詳しい結果は分からなかった。後日住職に聞いてみたところ、本山（東本願寺）報恩講での法要において、日没に行われる礼讃を逮夜と称することに関係が深いのではないか、という答えであった。

「月命日」は毎日するような性質のものではなく、その家の故人が亡くなった日（3 月 20 日に亡くなった場合は毎月の 20 日）にだけに行われる。28 日は親鸞聖人の月命日であるため、この日もいつもより多くの労力をお勤めに費やす。例えば、寺院へ赴いて皆で経をあげたり、いつもはオブクサマをあげない家ではそれを供えたり、信仰に篤い家になるとその日に僧侶を呼んで経を上げたりしてもらう、などである。先ほども述べたように、この日に読まれる和讃はそれぞれ決まっている。

仏壇だけでなく、墓へのお参りも現在ではよく見られる。仏壇と同じように、墓にも花を絶やさないようにお参りを週に一度くらい行っていると語ってくれた人が多かった。花は山や田畑の畦などから摘んできたり、輪島まで買って来たりしたものらしい。作法についてだが、まず墓の掃除をしてから花を供え、蝋燭を灯して線香をたき、正信偈を唱えるというのが大体の動きのようである。水をかけることはせず、上大沢・大沢では海風が強いため蝋燭も灯さない。墓が近くに来てからお墓参りによく行くようになった、という話などから、墓参りの習慣は近年になってから広まったと考えられる。さらに「他の家も行っているから（自分も）花を枯れさせないようにしてる」（60 代 女性）という発言からは、自発的に行っているのではないという意味合いも感じ取れた。

■『先祖の話』から

柳田國男が 1946 年に著した『先祖の話』では、彼の構想した日本人の有している神概念として、

33 年をひとつのサイクルとした故人の魂の没個性化（先祖化）。その後さらにそれが山の神や田の神となって年に数回（盆正月など）里へ降りて来る、という見取り図が表されている。これは現在でも日本の民俗学の中では主流の考え方として捉えられているらしい。この柳田の持論について考える上で、西保地区でも行われている田の神迎え（送り）は非常に重要な示唆を与えてくれる祭祀なのではないだろうか。田の神と先祖の関係を考えてみることで、この地区での先祖観が少しは見えてくるのではないか。

ここでは西保地区の田の神迎え（送り）と、先祖が戻ってくると考えられている正月について、簡単に触れておく。

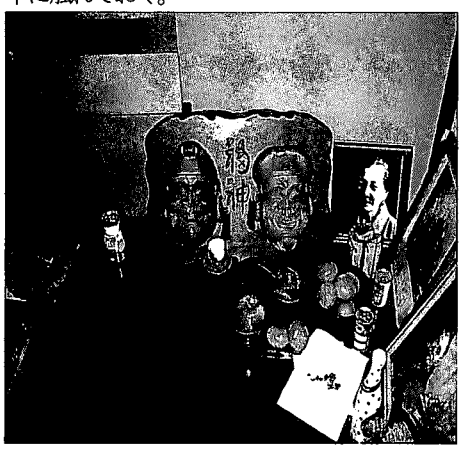

写真 2　田の神迎えのお膳

正月までにやるべきことは大掃除と神棚のしめ縄などの交換である。門松などは立てないのがこちらの習慣らしい。元旦は早朝に神社へ行って年始参りをしてから、朝 10 時頃今度は寺院へ行き、集まった門徒全員で正信偈を唱える。その後昼過ぎまで酒を飲んでの宴会が催される。

田の神迎え（送り）とは他の地域で「アエノコト」とも呼ばれ、広く知られている奥能登地方で行われている習俗である。家の田にはその家の田の神がいて、一年よく働いてくれた田の神に感謝の意を示すため、農閑期である冬の間神を家の中に招いて料理を御馳走し、ところによっては風呂に入ってもらうといったようなもてなしを行う。西保では 12 月 4 日に家の床の間にお膳を用意してこれによって田の神を迎えたこととし、休んでもらう。そして 2 月 4 日に再びお膳を出して神を送り出すのである。お膳に実際に料理が並べられるのはこの 2 日のみであり、その他期間中は空のお膳を供えたままにしておく。

以上がこの西保地区における正月と他の神迎え（送り）で行われていることの概略である。しかしここから何かを明らかにすることは出来ず、課題として残ったままだが、今現在この地区で実際に行われている習慣について稚拙ながら書いておくことに、先祖供養というものを考える上でも少なからぬ意義があると考えたため、紹介した。

4. 考察

前節までに過去と現在の先祖供養を見てきたが、変化した事柄の羅列ばかりで、肝心のそれらの行為を実際に行っている人々の心情については何も触れてこなかった。ここからはなぜ変わったのか、それについて何を思っているのかなど、寺院側門徒側双方に伺ったことをまとめてみたい。

聞き取りを始めて間もない頃、とある家で「お参りは行儀だから（行っている）」（50代男性）という話を伺った。その時はこのことばから、本心から宗教を信仰しているのではないのだという感想のみを抱き、いささか落胆したものだった。当然この西保地区に住んでいる人々も現代に生きる人々であり、違う価値観を有していると考えることの方が間違っているのだろう。

しかし近年になって生じている問題として、信仰心、ひいては宗教そのものの衰退があげられる。いわゆる寺離れである。

寺院側はこの問題について、「人が少なくなってきた。（近隣の地区では）潰れた寺もある」「時代の流れだからしょうがない部分はある」という僧侶の話のように、過疎化に伴う人口の減少や、高齢化、若者の宗教への関心の低下などをその原因としている。一戸あたりから受け取っている金銭についても、「決して多くない。こちらが生活していくことも出来ないくらい」と仰っていた。かなり厳しい状況にあると言えるだろう。

人々が宗教から離れつつある現在の状況については、門徒側も大いに憂慮している。だが、彼らはその原因について少し異なった見解を示している。時代の流れという原因に加え、寺院側の対応の悪さもまた、人々から信仰へと向かう心を失わせているのだと。

例えば、教えが手の届かないものになっていることに不満を洩らす声があった。寺院側にしてみれば、忙しい時期に一戸一戸にかける時間が減ることは仕方がないことなのだろう。だが、なぜ今これを読んでいるのかを教えることも、新しい世代へ信仰を深めるために必要なことなのではないか。

また、会計の報告をしっかりして欲しいという声もあった。ここで門徒側が主に問題としているのは、金銭を渡すことそれ自体ではなく、自分たちの渡した金銭がどのように使われているのかという点である。これについて寺院側から、「いろいろ難しい面もあるが、努力してみる」との意見をうかがった。これから改善されてゆくはずだ。

もしこれらの不満が解消されたとしても、新しい世代の人々が信仰を重視するようになるのかは分からない。信仰はこのまま消えて行ってしまうのだろうか。

そうではないはずだ。いくつかの家や寺院で何度も聞いた「生きている人のための信仰」ということばが印象に残っている。前述の通り、真宗の教義によれば故人はすべて仏になるため、追善供養[3)]としての先祖供養は行わないことになっている。彼らにとって先祖供養とは、先祖の冥福を祈るためのものではなく、正しい教えを導いてくれたことに対する感謝の念から行うものだという。ここで救済者である阿弥陀仏や、教えを創った親鸞聖人・蓮如上人、その教えを受け継いできた先祖、さらには自分にそれを授けてくれた親までがひとつながりのものとして信仰の対象となっていることが初めて理解できる。

以上を踏まえ、節頭の「お参りは行儀」ということばをもう一度考えてみたい。このことばが信仰心の衰退から来ていないことは明らかだと、聞き取りを進めた今なら分かる。お参りとは何者にも強制されない自分からの心で行うもの、つまり行儀なのだ。ある夫婦に聞き取りを行っている際、その娘である女性にも少し話をうかがう機会があった。そこで彼女に将来の先祖の供養について尋ねたと

ころ、「(先祖供養について) 年をとるごとにそういう気持ちになる。(自分も) 将来はすると思う」という明るい答えを聞くことができた。

正しく育てて導いてくれたすべての人に対する感謝の気持ちがあれば、その人たちに対する信仰はなくならないのだと信じたい。死後も自分のことを誰かが思ってくれているという思いは、人をしあわせにするに違いないのだから。

注

1) 浄土真宗は檀家のことを門徒と称することから、ここでは浄土真宗の信者のみについて言及しているときを「門徒」、他宗派の信者も含まれる場合を「檀家」としてある。

2) 概して、家の中での先祖供養を「お勤め」、墓などに場所を移して行うそれを「お参り」と使い分けているようだったので、ここでもそれにならう。

3) 故人のために残された家族が行う先祖供養。死後の苦しみを減らすために行われる。